

(2) 介護等体験を終えて 〈1〉

介護をする側と受ける側の相互理解の大切さを学ぶ

文学部 2年 S.T

全日程が終了して思うことは、驚きと発見の連続だった、ということです。

特別養護老人ホームでは、介護の現場を体験させて頂きました。まともにコミュニケーションをとれない方や、突然奇声をあげる方、1人では食事をとることが出来ない方など、実に様々な入居者の方々がありました。初めはどうやって接したら良いか分からず、手当たり次第にコミュニケーションを図ろうと試みました。しかし、「介助」というのは入居者の方々全員が受け入れた行為ではなく、怒られたりすることもありました。そこで気付いたのは、入居者の方々も、元々は五体満足で、介護をする立場の人間であった、ということです。自分の力で全てをこなしていた方ほど、自分の体に自由が利かなくなった時に、受け入れ難い現実なのです。そういった方だけでなく、入居者の方へのお手伝いをしてさしあげると、必ず「申し訳ない、本当にありがとうございます」といった言葉を頂きました。つまり、介護とは、介護をする側、受ける側の相互の理解から成り立つものなのだと思います。しかし、入居者の方々の理解を得るのは、本当に難しいものです。何よりほとんど全員が年上ですし、身の回りの世話を、自分の命を相手に委ねるということを簡単に受け入れられるのでしょうか。そういった、入居者の心や体の状況を理解させてもらうために介護の現場は日々努力されていると感じました。私の祖父も今、病院に入院中で少し症状が重いので、少し通じるものがありました。今度お見舞いに行きたいです。

特別支援学校では、障がいを持つ中・高生の授業を見学させて頂きました。最初はちゃんとコミュニケーションをとれるか不安でしたが、生徒達が驚くほどに明るく、とても障がいを抱えているとは思えない様子で、すぐに生徒たちと打ち解けることが出来ました。障がいの度合いは様々で、自分の意志をしっかり伝えることのできる生徒もいれば、集中力が短く、負担をかけると授業中に逃げだしてしまう生徒もいました。私が感じたのは様々な障がいを抱えた生徒が、同じ場所で共存しているということです。私たちは健常者と障がい者というように区別しますが、特別支援学校に通う生徒にとっては、そんなことは一切関係ありません。だからこそ、いじめや差別などは起こらず、生徒1人ひとりが自分の個性を持って、学校生活を有意義に送ることが出来るのです。教育を受ける権利がある子ども達にとって、これはとても重要なことで、私はその大切さを今回の体験で考え直すきっかけとなりました。